

「最後のカウボーイ」

——『マディソン郡の橋』にみる「男らしさ」の神話

別 府 恵 子

はじめに：ベストセラー、『マディソン郡の橋』

「立ち読みで『マディソン郡の橋』読破」¹⁾と川柳が読まれるくらいに、昨年話題になったベストセラー、『マディソン郡の橋』は北アイオワ大学の経営学教授である、ロバート・ジェイムズ・ウォーラーという無名の作家の作品である。この素人作家の第一作が出版された1992年に、アメリカで500万部が売れ、邦訳が出た1993年には日本でも200万部、1994年にも順調に売行きを伸ばして、おかげたの読者や出版業界の予想をはるかに上回るベストセラーソノリ小説になる。

ベストセラー小説とは、商品として売れるモノであり、渡辺潤氏の「ベストセラー論」によれば、「読まれる本」に対して「買われる本」ということになる。そして、「読まれる本」＝「純文学」に対して、「買われる本」＝ベストセラー小説は、ポピュラー文学の範疇にはいる「多くの人々に読まれ楽しまれている小説」²⁾を指示するという。ベストセラー小説が、多くの読者に楽しまれる理由は、文学的価値とは別に、「気晴らし」、「現実逃避」、あるいは「願望の代償行為」、いわゆるシミュレーションなどの魅力を兼ね備えているからだ。つまり、ベストセラー小説には、読者の願望、夢、感情、生き方、大きさにいえば哲学までが、小説のなかの人物にあるいは物語に投影されている。さらに、社会・文化現象としてのベストセラー小説は、それを作り出したそれぞれの時代や社会を克明に映し出す歴史ドキュメントにもなり得る。

上に述べたような、「願望の代償行為」を可能にしてくれる商品（＝モノ）と

「最後のカウボーイ」

してのベストセラーが指示するものを明らかにすることは、不特定多数の読者の願望や、(翻訳すれば) 現代という時代や社会に欠落しているものを認識することでもある。まず、『マディソン郡の橋』(*The Bridges of Madison County*, 1992) は、中高年男女の恋愛(=不倫)を純愛物語として読ませたこと。作者の言葉をかりれば、大恋愛が感傷とされ³⁾、セックスがインスタント食品で飢えを満たすような便宜的なモノと化した時代に、男と女が愛することの意味、「エロス」とは何かという問いかけをしたこと。さらに、感情を抑えることなく無節操が横行する時代(80年代、90年代)に、逆説としての「抑制」の重要性を呈示したことだろう。だが、この小論の目的は、あまり問題にされない『マディソン郡の橋』のもう一つのテーマ、「絶滅寸前のある種の男」、「最後のカウボーイ」(pp. 100-01) のあり方、生きざまの美学に注目して、「男らしさ」の神話あるいはその解体として『マディソン郡の橋』を読むことである。

「男らしさ」の神話

昨年秋、来日したロバート・J・ウォラー氏と高樹のぶ子氏との誌上対談(『マルコポーロ』、1994年9月号)での作者の指摘を待つまでもなく、ベストセラー『マディソン郡の橋』は、ロバート・キンケイドに代表される男の物語である。同インタビューにおいて、ウォラーは小説執筆の動機を、「ある男がいた。彼に私はとても興味がある。それがキンケイドであり、ティルマン⁴⁾である。その男について書きたかった。書いてみたら、人々はそれを恋愛小説」として読んだと説明するように、『マディソン郡の橋』はロバート・キンケイドの物語だ。つまり、彼が描きたかったのは、現代社会で消えつつある「ある種の男たち」だという。「年老いていて、テレビのない時代に育ち、大人になったらアマゾン川の船長になりたいと思っていた、そんな古いタイプの男たち⁵⁾の夢や生き方をエッセイ風に書いたのが、ウォラーの小説である。したがって、フランチェスカとのロマンスも「最後のカウボーイ」の人生に花——そういう男がこの世に存在していたとの証明——を添えるものでしかない。キンケイドが

「最後のカウボーイ」

旅の途中、モーテルでページをくる『アフリカの緑の丘』(Green Hills of Africa, 1953) の作者ヘミングウェイのように、キンケイドもまた、「男らしさ」の神話に拘る男。だが同時に、そうした「男らしさ」の神話を生きた男たちと違って、長い間「支配的」が「男」を指示し、「非支配的」＝「女」という図式⁶⁾が崩壊しつつあることを、つぶさに感じている人間のひとりでもある。

シモーヌ・ド・ボーヴォワールの「人は女に生まれるのではない、女につくられる」(『第二の性』、1949年)という、画期的な言説に端を発したフェミニズム論議がすでに過去のものとなり、「性差」を問題にする場合、単に生物学的性(セックス)のものとせず、社会的性(ジェンダー)の概念を導入するのがいまの常識だ。こうした風潮のなか、「男らしさ」＝男性性の分析や研究が社会学者、人類学者の関心を集め、ここ数年の間に興味深い男性論が発表されている。その一つ、デイヴィッド・ギルモアの『「男らしさ」の人類学』(David D. Gilmore, *Manhood in the Making: Cultural Concepts of Masculinity*, 1990)の邦訳が昨年出版されたが、邦訳書の帯にある「人は男に生まれるのではない、男に作られるのだ」は、上に触れたボーヴォワールの言い換えだ。ただ、こうした認識を受容するのに些か時間がかかったようである。しかし、女性学に遅れをとるもの、メンズリブ、男性解放、と「男らしさ」の呪縛からの解放を提唱する男性学が静かに潜行していることも事実だ。

文明史上、(不幸にして)「支配的」＝美男を任じていた男は、社会生活でも男女関係においても主体であること、主導権を持つことを自明の理としてかつて疑うことがなかった。ところが、21世紀を前にして、西欧中心、人間(=男)中心のパラダイムが、政治、経済、社会、文化、自然環境など様々な分野での行き詰まり＝硬直状態の原因であることに、社会が男が認識し始めたのである。もっとも、西欧中心、人間(=男)中心のパラダイム転換の契機となり、それに拍車をかけたのは、フェミニズムの台頭であることに異論はなかろう。とくに、60年代後半から70年代にかけて、アメリカにおけるフェミニズム運動と連動した、フェミニズム論議、言説、学界における女性学の確立が果たした

「最後のカウボーイ」

役割を無視できない。そして、先述のとおり静かに潜行していた「男性学」への関心が、90年代になって顕在化されている⁷⁾。

こうした社会思潮をポピュラー文学の言説のなかで、作者が問うているのが、『マディソン郡の橋』の主人公、ロバート・キンケイドこと「最後のカウボーイ」の生きざまといえる。そこで、キンケイドという、ある種の男が体現する男性性の神話が指示するものとは何かを検討してみたい。というのも、キンケイドがいう「放し飼い」 = “free range” (p. 101) は、組織化され、管理主義が徹底した文明の行き詰まり、さらに、硬直化=マニュアル化した人間（男と女）関係を是正するための必須条件であり、その必要性を呈示したウォーラーの小説をベストセラーにしたのである。また、いわゆる「マディソン郡の橋」症候群現象と、「男らしさから自分らしさへ」、「自分解放」支援しますなど、ジャーナリズムの言説⁸⁾との間に相関関係が見られるのである。

アメリカン・ヒーローの系譜

アメリカ／文学／文化におけるヒーローといえば、まずタフ・ガイ=肉体的に強い男、大きい男。だが、単に強いだけ、体が大きいだけでは「男らしい」男、ヒーローにはなれない。強い男は物質欲にとらわれず、ストイックでなければならぬ。人間というものに対する慧眼を持ち、必要となれば優しくもなるはづ。侮蔑（とくに卑怯者と呼ばれること）には敏感に反応し、偽善や卑しさへの軽侮の念、正義感は人一倍強くなければならない。さらに、孤独であっても機知に富み、常に余裕のある男。ジェイムズ・フェニモア・クーパーの『革脚絆物語』(The Leather-stockings Tales, 1823-41) の主人公ナッティ・バンボに遡るアメリカン・ヒーローが、「男らしい」男、男性性を指示する。また、ナッティ・バンボは文明社会に対してはきわめて懐疑的だ。なぜなら、荒野では白と黒、歴然としている綻をことさら曖昧に複雑にしてしまうのが文明社会の論理であり、規律であることを見抜いているからだ。したがって、女を愛しても結婚し家庭を持つことはせず、社会の慣習に組み入れられることを拒

む。従来、アメリカにおけるヒーロー、「男らしい」男とは「ハヤブサ」に象徴される「放浪者、旅人」⁹⁾ (pp. 111–125)、「放し飼い」のカウボーイなのだ。

クーパーの創造したアメリカン・ヒーローが、ハリウッドのウェスタン=西部劇映画の主人公、孤独なガンマン、カウボーイへと、そしてフロンティアの消滅した20世紀のアメリカの大都会を舞台にした、ハードボイルド小説の私立探偵、マーロウ、スペンサーに受け継がれていると¹⁰⁾、ロバート・B・パーカーはいう。そして、現代のカウボーイはまさに、「ダーウィンの進化の樹の末端」(p. xi)、その先はゼロという「絶滅寸前の種」、マーロウ、スペンサーの末裔、大都会の悪にひとり挑戦するはみだし刑事（ディテクティヴ=探偵）だ。クリント・イーストウッドが演じるダーティ・ハリーことカラハン刑事が自動連発銃を武器に、「目には目」の論理で都会の悪に挑戦するカウボーイの「動」を表わすとするなら、『マディソン郡の橋』の主人公、ロバート・キンケイドは暴力を放棄した「静」のカウボーイ。銃の代わりにカメラを道具に、組織化され、管理主義の横行する文明社会に背を向けて、自然の風景を写し、その風物を愛で、美の創造に従事する「気弱なシェーン」が、『マディソン郡の橋』の主人公、キンケイドだ。そして、彼もまたカウボーイの末裔、アメリカン・ヒーローの系譜につながる男=アメリカ人の一つのあり方への共同幻想を体现するキャラクターだ。

『マディソン郡の橋』

『マディソン郡の橋』の時間は——キンケイドとフランチェスカのロマンスのリアル・タイム（1965年夏）とそれが回想され語られる時（1989年）——の二重構造になっている。当然、20年以上の沈黙の時間もドラマの重要な一部である。物語の時代背景は「鎮静剤を打たれた50年代」¹¹⁾ につづく1960年代——JFK暗殺後、公民権運動、ベトナム反戦運動とアメリカ社会が激しく揺れた時代。若者文化、ドラッグ・カルチャー、性の解放に象徴される対抗文化の全盛時代でもあり、ビートルズのロック・ミュージックやボブ・ディランのプロ

「最後のカウボーイ」

テスト・ソングがもてはやされた10年間。そうした時代や社会背景を後景にアメリカのハートランドといわれる中西部はアイオワ州、マディソン郡の田舎町を舞台に、繰り広げられるロバート・キンケイドとフランチェスカ・ジョンソンの牧歌的なロマンスを前景に小説の構図ができ上がっている。

しかし、1960年代といっても、東部の都市とは異なり、中西部の小さな町では依然として保守的思考、文化が支配的であり、個人の感情を抑えた、閉ざされた生活がきわめて当然のこととして営まれる。ティーンエイジャーたちの週末の過ごし方も、町の中心である広場にたむろして、女の子をからかうといった無邪気なものだ。ヒッピー（60年代、若者の間に生まれた反体制主義者）などは警戒され、長髪は女を指示するものとの固定観念があり、奇妙な格好をした長髪のキンケイドは好奇心の的となる。彼がテキサコのガソリンスタンドで道を尋ねると、たちまちのうちに、町中がその噂で持ちきりという偏狭なコミュニティーだ。それだからこそ、「日に日に無神経になっていく世界」(p. xii)に失望したキンケイドが心のふるさとを求めて、懐かしい昔の西部を象徴する「屋根つき橋」が、アイオワ州のマディソン郡に残存していると聞いて、それを撮影しにやってくるのだ。

ロバート・キンケイド、52歳。生まればオハイオ州バーンズヴィル。職業、フリーの写真家・著述家。『ナショナル・ジオグラフィック』誌の契約写真家として生計を立てている。写真が絵画・彫刻などと同様に芸術として、写真屋が芸術家として市民権を得たのは20世紀も後半のことだ。したがって、キンケイドは写真家という新しいタイプの芸術家（＝ボヘミヤン）ということになる。第二次大戦には兵士としてでなく従軍カメラマンとして参加し、太平洋戦線でも、戦場の報道写真を撮り、戦闘には参加しなかったという。戦後も華やかな報道写真家の道を選ばず、企業組織に組み込まれることなく、世界各地を放浪しながら、撮りたい写真を撮る（彼は創るという）。ここに暴力には手を貸さないカウボーイ、平和主義者としてのキンケイドが描かれるが、彼が戦争を嫌い徹底した平和主義者であることは、復員軍人局から送られてくる小切手を「差

し出し人戻し」と書いて返送していたことによって証明される。

キンケイドは早くに両親を亡くし、兄弟もなく天涯孤独の身。旅が多い彼に愛想をつかした妻に家出された離婚歴のある主人公。家庭生活、定住生活は性にあわないと、カウボーイ人生を生きる条件は揃っている。「カウボーイ」という職業は南北戦争後、家を焼かれ家族を失った多くの南軍兵士が、新しい生活を求め、新しい将来をたくして大西部の荒野に流れてきたのが、職業としてのカウボーイ稼業の始まりであるという¹²⁾。彼らの生き方が1870年代に流行した大衆小説に語られ、伝説の「カウボーイ」神話をつくることになる。まさに、イメージはつくられるのだ。そして、ある種のシミュレーション効果が「男らしさ」の神話の再生産に荷担する。

1965年8月8日、ワシントン州ベリングハムをおんぼろのピックアップ・トラックで出発するキンケイドのいでたち——色あせたリーヴァイスに、よく履き込んだレッド・ウイングのフィールド・ブーツ、カーキのシャツ、それにオレンジ色のサスペンダー——は現代のカウボーイのカリカチュア。それにカメラマン用のヴェストと、幅広の革のベルトにはスイス・アーミー・ナイフをぶらさげるという機能本位の服装である。ヴェストもカウボーイが上着の代わりに愛用したものである¹³⁾。所持品として、トラックにはカメラ機具、三脚が二台、フィルム、アイスピックス、サーモスの魔法瓶、ギター・ケース、キャメルのカートン数個が積んである。着替えとして、ジーンズとカーキのスラックス、シャツが数枚と、無駄のない最低限度の生活必需品である。

ここで、数個のキャメルのカートンに注目したい。すなわち、キンケイドはかなりのヘビースモーカーであるということだ。自然環境保護、公害対策が社会の関心を集めている現在、タバコの宣伝でもないが、タバコのコマーシャルにはよく「カウボーイ」姿の男が起用される。馬上のカウボーイがタバコに火をつけ、「ここは、マールボロー・カントリー」というコマーシャルがあるが、そのイメージが奇妙にも『マディソン郡の橋』のなかで、機会あるごとにキャメルに火をつけるキンケイドと重なるのだ。そのマールボローの最近のコピー

「最後のカウボーイ」

に、「ここでは、放し飼いが大きな意味をもつ」、あるいは「男たちが通ったところ、それがやがて道と呼ばれる」というのがあるが、「放し飼い」とか、「男たちが通ったところ」が「道と呼ばれる」など、カウボーイのあり方や生きざまを特徴づけているものが、小説のなかで語られるキンケイドのあり方や生きざまに反映されている。ここで強調されるのは、カウボーイ人生の放浪癖、無宿性であり、反社会性だ。カウボーイは、風のように自由で、気ままな人生と引き換えに孤独を生きることを強いられる。孤独に耐えられず、一夜の安らぎを求めることがあるが、やはり話相手としても女より犬の方があと腐れなくていい。こうしたカウボーイのあり方や生きざまが、「男らしさ」の神話を生み、彼ら=男たちの過酷な現実を美化し支えてきたといえる。まさに、「男性性」もまたつくられてきたのである。

「最後のカウボーイ」

映画メディアや大衆小説がつくり出したカウボーイ、「男らしい」男は決して弱音をはかないものとされているのだが、『マディソン郡の橋』のキンケイドは、話相手が欲しい、人肌恋しいと弱音をはき(pp. 3, 7)、きわめつけにゴールデン・レトリーバーを飼うきわめて俗っぽい気弱なカウボーイでもある。彼の陳腐(=ファショナブル)な趣味も、現代の「カウボーイ」像を皮肉ったものの。物語の最初から、キンケイドのよく鍛えられたゼイ肉のない強靭な肉体にしばしば言及がされ、彼の体や動きのしなやかさ、優雅さに惚れ惚れするフランチエスカが描かれるが、同時にキンケイドは「幽霊のような」、「とらえどころのない」、「何処か別の星からやってきた」(p. 83) 人間と描写され、その実在感が希薄で、存在感がない。これは、作者が意図したことであろう。なぜなら、『マディソン郡の橋』のキンケイドは、フランチエスカの追憶のなかにしか存在しない恋人であり、「男らしい」男、「最後のカウボーイ」なのである。キンケイド自ら証言するように、彼はやがて絶滅の運命にある「最後のカウボーイ」、「男らしさ」の神話からの解放を訴えているカウボーイなのである。

「最後のカウボーイ」

キンケイドは、フランチェスカ相手に甘い恋の言葉でなく——愛の表現は行為で示せば充分とでもいいたげだ——「最後のカウボーイ」にとって「放し飼い」が如何に大切か、そして「男性ホルモン」の攻撃性について熱弁をふるう。すでにみたように、『マディソン郡の橋』はある種の男の夢、生き方をエッセイ風に綴った小説である。それが、物語の時間の二重構造ともあいまって、時代、社会批評にもなる。それに少し触れて結論としたい。

「地球上の災いの元凶は男性ホルモンだというのがわたしの主張だ」と彼はフランチェスカに熱っぽく語る。核時代の戦争における暴力（ミサイル）、自然破壊などにつながる闘争本能や攻撃性、支配欲はすべて男性ホルモンの仕業だという（pp. 102-03）。キンケイドが暴力を嫌うことはすでに触れたが、クーパーのヒーロー、ナッティ・バンポも決して不必要的殺りくはしない。無駄な暴力は行使しないのが、眞の「男らしい」動物、男なのだ。だが、「男は強くなければならない」との言説によって「男らしさ」の神話はつくられ、暴力が、攻撃性が正当化されてきたのである。その愚かさを『マディソン郡の橋』の「最後のカウボーイ」は訴える。キンケイドを時代錯誤の「ロマンチスト」、その生き方を「感傷的」と言うことは容易である。だが、作品中それが単なる感傷主義に終っていないのは、先述のとおり、西欧文明、人間（=男）中心主義が主張してきた価値観の終焉を冷静に見つめる視点があるからだ。

そうした視点が使い捨て文化の批判にもなる。たとえば、キンケイドが屋根つき橋の撮影のため、ワシントン州から遠路運転して来た古いピックアップだが、調子はずれのエンジンを12年の間に、2度新しいエンジンと交換したというから、一生古いトラックに乗っていたことになる。仕事に必要なカメラや機具、着るものもまたしかりと、使い捨て文化の痛烈な批判が作品中に散見される。また、「太古のしぐさ」＝エロスの神秘性が剝奪された、堕落した男女関係が問われ、こうした人間関係を如何に自由な創造的なものにできるかという問題提起に発展していく。家族関係、キャリアと結婚など現代社会が抱える問題も指摘される。

「最後のカウボーイ」と「男らしさ」

語り手（フランチェスカではない）が想い描くキンケイドこと、「最後のカウボーイ」とは、「あらゆるものが組織に組み込まれていく」管理社会のなかで、風のように自由であることを切望する男（あるいは女）を指示する。何物にも拘束されずに自立して生きる強い男が、アメリカ人が理想としてきた伝統的なヒーロー像。キンケイドの言葉をかりると、「消えつつある種」、ハヤブサに象徴される「放浪者、旅人」であり、アメリカ西部開拓時代に活躍した、伝説の放し飼いのカウボーイである。そのイメージが喚起する生き方やあり方、男性性の原点は何かという問いかけは、男だけのものではないはずだ。「放し飼い」＝“free range”は、すべての人間にとて不可欠な生きる条件でもあるからだ。フランチェスカを相手に切々と吐露される文明批判（＝口説き文句）は、「最後のカウボーイ」への鎮魂歌としてフランチェスカの『ジャーナル』（pp. 147–161）に綴られる。さらに、フランチェスカの子どもたち、成長したキャロリンとマイケルの依頼を受けて、『マディソン郡の橋』を書くことになった作者自身の「最後のカウボーイ」への鎮魂歌が「エピローグ」において語られる。

ウォーラーの小説は「ハイウェイ」とも「ハヤブサ」とも形容される「絶滅寸前の種」の最後の男、ロバート・キンケイドの晩年の消息を尋ねて作者がワシントン州タコマで得た情報を、もうひとりの「最後のカウボーイ」ともいえる、テナーサックス奏者、ナイトホーク（ホーク [=hawk] はハヤブサ [peregrine] を連想させる）とのインタビューで終るが、その時点で『マディソン郡の橋』は恋愛小説でも不倫物語でもなく、ロバート・キンケイドという男の物語となるのである。

註

- 1) 1994年11月11日付『朝日新聞』、「天声人語」
- 2) 中嶋昌弥編『ポピュラー文学の社会学』（世界思想社、1994年）、pp. 24–49。

「最後のカウボーイ」

- 3) Robert James Waller, *The Bridges of Madison County* (New York: Warner Books, 1992), p. xii. 以下、同書への言及はすべて引用のあと括弧のなかにページでもって示す。日本語訳は村松潔訳『マディソン郡の橋』(文芸春秋社、1993年)を参考にさせてもらった。
- 4) Robert James Waller, *Slow Waltz in Cedar Bend* (New York: Warner Books, 1993) の主人公、マイケル・ティルマン。
- 5) 高樹のぶ子との「インタビュー」、『マルコポーロ』(文芸春秋社、1994年9月)、pp. 76-79.
- 6) 橋本治著『美男へのレッスン』(中央公論社、1994年)、p. 17.
- 7) 二、三の具体例をあげると、小浜逸郎著『男はどこにいるのか』(草思社、1990年)、『「男らしさ」の人類学』(Yale University Press、1990年)。日本語訳、前田俊子、1994年)、橋本治著『美男へのレッスン』(中央公論社、1994年)など。それぞれ、男性の手になるフェミニズム入門書であり、男性論、男性学への試みである。
- 8) 『日本経済新聞』(1990年1月7日付)、『朝日新聞』(1995年1月1日付、同1月8日付)
- 9) *The Bridges of Madison County* には「ハヤブサ、放浪者たちへ」という献辞がついている。
- 10) Robert B. Parker, *The Private Eye in Hammett and Chandler* (New York, 1990)、『ハメットとチャンドラーの私立探偵』(朝倉隆男訳、早川書房、1993年)
- 11) Robert Lowell, "Memories of West Street and Lepke" (1965)
- 12) *The Reader's Encyclopedia of the American West*, ed. Howard R. Lamar (New York: Harper & Row, 1977), pp. 268.
- 13) *Ibid.*, pp. 268-72.

Summary

“The Last Cowboy” — The Myth of Masculinity in *The Bridges of Madison County*

Keiko Beppu

The past few years have seen the publication of interesting gender studies on cultural concepts of masculinity such as David D. Gilmore's *Manhood in the Making* (1990) or Osamu Hashimoto's *Lektionen für einen schönen Mann* (1994), to name only a few of such attempts. These books alert the reader to the gap between the myth and the reality of manhood, reassessing the idea of the virile man who has reigned the world for thousands of years. Like femininity, they so claim, masculinity is no more than a cultural construct. The handsome man (= the ruler) is as elusive and ethereal as the portrait of Robert Kincaid, the last cowboy in Robert James Waller's novel.

In the interview he had last fall with Ms Takagi for *the Marcopolo*, the author of *The Bridges of Madison County* (1992) explained the “origin of the fictive picture” as the vision of a shy last-of-a-dying male animal; the book has turned out to be the best selling novel of a romantic love story pure and simple. Waller's novel, however, is not so much a romantic tale as a story of Robert Kincaid the last cowboy, who feels out of harmony with the world and his time, “given over to increasing amounts of organization,” where people have given up “free range.”

Such vision of a peculiar kind of male animal finds its prototype in the American hero created by James Fenimore Cooper in his *Leather-stockings Tales* (1823–41), a loner in the wilderness, self-sufficient and free like the

wind. He is a "peregrine," a perennial traveler who is always on the road, doomed to live a life of solitude. This image of American hero has been identified with that of the cowboy introduced in the popular pulp fiction of the 1870's. The foolhardiness (courage), toughness, and the rootlessness of a cowboy's life have in turn created the romantic picture of a nomadic life synonymous with masculinity in American culture/literature.

In Robert Kincaid the author has given an endearing portrait of the popular notion of the American male, who is, however, becoming obsolete, a dying species. Simultaneously, the novel exposes the evil inherent in the myth of the virile man, because the aggressiveness he represents keeps people apart from each other and from the problems we need to be working on. *The Bridges of Madison County* is a requiem for "the last of the cowboy", Robert Kincaid.